

# 風土



つくつくし

神蔵器

黒姫の山走り来て芋の露  
つくつくしつくつくし「七番日記」かな

畦跳んで草の穂つかむお胞衣塚

とんぼ飛ぶ夕べ信濃のむらさきに

一茶旧居

これやこの蟬の羽衣つつがなし

湖の水減らず殖えずに盆の月  
たましひの涼し魁夷の「夕星」も



子規居士の出でし穴なし蟬時雨  
きのふけふ弦鬼来てをり秋の蝶  
ふるさとの風真つ直ぐに稲の花  
愛するは溺るることか酔芙蓉  
納骨義父はきのふにからす瓜の花



# 竹間集

同人作品



姉ありて

浜

福恵

健やかに姉在り鮎に化粧塩  
土橋一本仔鹿を森へ帰すみち  
兎追ひし山よ墓標よ葛の花  
伏兵のごとき雀よ芒原  
ちちははの齢を生きて墓洗ふ  
細道は隣へつづく糸瓜棚  
バス着くやざんざか踊の灯る村

花莫塵

蓮尾あきら

洞穴もむかしかくれ家河鹿鳴く  
おもはずの洞の岩魚と目を合はす  
かはせみや川面にうつる御輿庫  
莫塵敷きて祭芝居の夜となりぬ  
前山のかたちには寝椅子  
山小屋にひとりの夜の青葉木菟  
新涼や声かけてゆく貸ボート

盆

鈴木とおる

生きてゐて八十七歳盆用意  
河骨の花の盛りの鏡池  
犬吠の沖を踏まへて雲の峰  
合歓の咲く且て黒川分教場  
寝て三日入道雲に日の残り  
荒壁の土蔵をつかむ凌霄花  
盆棚に眼鏡を添へて『鱗雲』

昆虫の森

一 鈴木 石花

歩  
数  
計  
を  
零  
に  
し  
て  
出  
る  
朝  
曇  
ひ  
ね  
も  
す  
を  
歩  
く  
心  
算  
の  
夏  
帽  
子  
行  
啓  
の  
通  
る  
門  
毎  
水  
を  
打  
つ  
老  
鶯  
や  
桐  
生  
市  
長  
の  
背  
筋  
伸  
ぶ  
皇  
太  
子  
に  
笑  
み  
を  
齎  
す  
梅  
雨  
の  
蝶  
山  
中  
に  
一  
つ  
の  
祠  
滴  
れ  
り  
赤  
城  
背  
に  
昆  
虫  
の  
森  
田  
水  
張  
る  
池  
の  
面  
の  
光  
を  
滑  
る  
水  
馬  
掃  
ひ  
て  
も  
眼  
鏡  
に  
戻  
る  
て  
ん  
と  
む  
し  
真  
直  
ぐ  
に  
立  
ち  
群  
生  
の  
夏  
薊

郭公や土間に照りある大藁家  
夏蚕飼ふ昔の家にむかしの灯  
山の上に親子の集ひ青葡萄  
昆虫の生態映す冷房裡  
和太鼓の演奏響く芝青し  
昆虫館ガラスドームに滝おとす  
吾の肩に暫しを憩ふ黒揚羽  
日盛りの石階に聴くコンサート  
コンサート果てて氷菓の列につく  
夏燕飛び交ふ駐車場広し

# 山河集

同人作品



神蔵器選

青梅雨の大方丈を開け放つ  
螢火や水の闇より笙の笛  
緑陰にランプ小さき喫茶店  
草刈つて草の匂ひの風吹けり  
蚊を打つて閻魔堂まで参りけり

平田紀美子

夏場所

羅のとなりに坐る砂かぶり  
垂直に仕舞ふ指揮棒雲の峰  
トランクに楽譜をつめる夏の旅  
家計簿に書けぬ買物「浮いて来い」  
めまとひに追ひつめられてゐたりけり  
黒南風や島を重石に海暮るる  
帰り船来るを待つ間の心太

柿沼盟子

中村洋子

東照宮奥舎

万緑や宝塔を守る一角獣  
下るれば関東平野に日雷  
踏切板の幅十センチ蟻地獄

生田恵美子

旅人に蠅の親しき漁師町  
ゆるやかに蓮田の奥の風動く  
人に遅れて仁王門前涼しかり  
糸蜻蛉女院塚の辺を去らず  
蟻地獄勤行届く緑の下

町中に比叡の湧水跣足の子  
祭鉾稚児のまなこの真つ直ぐに  
大丸の鱧ずし買うて戻りけり  
縁側より素足を垂れて帰郷かな  
親指の喜んでゐる素足かな

浅田光代

◇特別作品◇(抄)

## 生地横浜を訪ふ

竹生田勝次

よそよそしみなとみらいの大夕焼  
潮風やラムネの旗の翻る  
埠頭へと涼とる人に加はりぬ  
飛びはねて鯨大棧橋に背をそらす  
落丁の地図かと生地夏果つる  
雑魚追憶五句ひさぐ舟河岸に着く薄暑かな  
薫風や父の荷台の背中に添ふ  
伯母訪へば伊勢佐木町に鰻食ふ  
山車引いて小さき梨を配らるる  
とんばう追ひて迷路に入りぬ中華街



# 風土独語／神蔵 器



茶々よりも先に一ヶ月の道

奥田 弦鬼

七月十四日、金曜日は「新百合句会」の日であった。句会は定刻午後一時に始まり、選句披講といつもの通り進行していた。披講には度々弦鬼さんの句が読み上げられ、その都度、代返されていた。思えば丁度その時刻、弦鬼さんは日赤病院にて、息を引きとっていられたのである。

掲出句は弦鬼さんの辞世の句。「風土」に入会されて約四年であったが、俳句にかけた情熱はすさまじいものであった。おそらく脾臓癌の手術の後であったので、ご自分では、残る余命も解っていられたのかも知れない。一本の月の道―は弦鬼さんの人として生きる生涯の信条、そしてこの句は俳句にかけた愛とまことの結晶であり、端的に言えば、奥様への感謝と、自分の亡きあとの奥様への励ましの言葉でもあろう。

それにしても、どうしたらあんなに平静な日常が送れたのであろうか。私はたった今、すさまじいと書いたが、少なくとも表面的にはいつもと変わらない静かであせらず落ち着いていた。それだけに後になってからだが、かえって壮絶な思いがしてならない。

修羅引きに舟洗ふ日や盆の海

近藤幸三郎

「修羅引き」とは聞き馴れない言葉である。私ははじめ、丸太

を縦に並べて半円形の溝を作り、その中を滑らせて木材を運搬するのを「修羅落し」というと聞いたことがあるが、「修羅引き」もそれに類することかと思つたがよく解らない。それで作者にお聞きした。漁師が舟を砂浜に引き揚げる方法とのことである。

砂浜に適当な間隔で丸太を並べ、その上に舟を乗せ、舟に結びつけた長い綱をかぐらさん（轆轤）で巻き取りながら、丸太の上を舟を滑らせて岸の方へ引き揚げる。漁も盆休みに入るので舟を洗い、舟を引き揚げておく。舟は重くかぐらさんは家族総出で廻したり、近くの主婦なども手伝ったりする。まさに重労働で「修羅引き」の名が出たのであろう。

放射切りのカマンベールや巴里祭

鈴木 庸子

カマンベールはフランスのナチュラルチーズ。日本でもマイルドでクリーミーな美味しさが好まれている。市販の普通の大きさに十糎ぐらいの円形で、これを中心から放射状に切り分けると一切れが二等辺三角形の手頃の大きさになり、ワインをはじめ各種洋酒のおつまみ、オードブルに最適である。

庸子さんは七月十四日のパリ祭の宵も、何処へも出掛けずご主人と一人、カマンベールをおつまみにワインを傾け、かつてヨーロッパ旅行した時の巴里などを思い出し語り合っているのではなからうか。もう若くはないし、銀座などで一晚中飲んでさわぐよりはるかに巴里祭らしく、そんな巴里祭もよいものだ。（以下略）

# 風土集



## 神蔵器選

茶々よりも先に一本月の道 東京

奥田 弦鬼

網目より香るメロデイ青メロン

酸素ボンベ背負ひで虫歩きかな

梅雨寒や子規より痛み軽からん

共白髪 口数減りて冷奴

武蔵野の万緑の中蘆花眠る 川崎

井上 あい

晴耕雨読の鎌の錆びつく半夏雨

大井川の大うねりして雲の峰

川根路にS L列車ねむの花

梅漬けて齢をもどしぬたりけり

修羅引きに舟洗ふ日や盆の海 横浜

近藤幸三郎

船虫の仮死もあらざる怒濤かな

夏草や墓標北向くサンダカン

母あらば家にもありし青鬼灯

註 マレーシア、カリマンタン島東部の港都

研して残暑のビルの打鋏音

果実酒壘並ぶ厨や半夏生

鉄鍋で飯炊いてみる土用かな

放射切りのカマンベールや巴里祭

火渡りて塩にうづめし素足かな

乱切りの野菜を炒む土用かな

僧に蹤く百間廊下の素足かな 横浜

中村 洋子

茄子を挽ぐ大和三山雨の中

白南風に研ぎ皮吊す柱かな

円空仏合歡のねむりとなりてをり

子規庵へ朝顔市の鉢を提げ

青鬼灯のさきの尖りや布の靴 東京

柿沼 盟子

七月の鞆に満たす小物かな

駐車場より飛礫となりて親燕

百合の咲く山陽自動車道西へ

ひと息に飲み干す水や雲の峰